

狐巫女の 嫁入り

KITSUNEMIKO
NO
YOMEIRI

青橋由高
梢日向
illustration



成人向け
ADULT ONLY

青橋商店
AOHASHIGO NOVELS

Story

隠れオタクとして人畜無害な好青年を演じてきた公務員『湊』が念願のマイホームを建てたのは、かつては山だった過疎の土地。

「ホームシアターでがんがんアニメ観まくるぜ！」

ところが地下室を作るために掘ってみると謎の祠が。

「儂はナル。かつてこの一帯を守護していた妖狐じゃ」ある日、その祠から狐の耳と尻尾を生やした巫女さんが現れて平穏な生活は一変。

「膝枕をするのじゃ。耳搔きをするのじゃ。尻尾のお手入れをするのじゃ」

黄金色の尻尾をもふもふしつつ、だらだらイチャイチャしながらまったり二人暮らし。

そんなとき、湊にお見合いの話が持ち込まれて……？

「狐きつね巫女みこの嫁入り」

青橋あおはし由高ゆたか（著）
稍日ややひ向なた（イラスト）

目次

プロローグ

5

第一章

7

第二章

57

第三章

84

エピローグ

123

あとがき

125

電子版あとがき

128

彼女はぼんやりと生まれ故郷の山を漂っていた。

ふわふわと。

ふよふよと。

ふらふらと。

(退屈じゃのお)

眼下に広がるのは整地だけされてそのまま放置された、かつての山の一角。民家はまばらにしかなく、彼女の退屈を紛らわしてくれそうなものはなにもない。

(ん？ なんじゃ、あやつらは)

この辺りに住人以外がやって来るのは珍しい。しかも一人二人ではない。どうやら工事関係者のようだ。

(ほお。こんな辺鄙な場所になにか建てようというのか。酔狂な人間もおったものだ)

まさかその酔狂な人間が己の未来を変えるなどとは夢にも思わず、彼女は大きく口を開け、あくびをする。

彼女は静かに目を閉じ、

(退屈じやお)

何十年も見上げ続けた青い空に向けて、同じセリフを呟いた。

人間たちが工事を始めた土地が、かつて自分が封印された祠のある場所だったことなどまったく気づかずに。

第一章

鳥居湊とりいみなとが公務員になったと聞いたとき、大半は「ああ」と納得した顔になる。つまりは彼が、一般人が抱く公務員のイメージにぴったりと思われているからだろう。

一方、「お前が公務員!？」と驚くのは、湊の本性を知ってる近しい者たちだ。曰く、「お前、捕まるなよ」

「他の公務員のためにも堪えるんだぞ」

「てっきり、そっち方面の道に進むもんだと思ってた……」

などと、一様に不安げな表情を浮かべる。中には、まだ遅くない、別の仕事を探せと真剣に諭してくる友人すらいたほどだ。

そんな湊も今年で二十六歳、公務員生活も四年目となった。

(くくく、ついに……ついに長年の夢の第一歩を踏み出せるぞ。よく頑張ったな、僕)

まったく縁のない地方に自ら希望して赴任したのは、子供の頃からの夢だったマイホームを可能な限り早く建てるためだった。

少しでも土地が安く、静かで、隣との距離が離れた家が欲しかったのだ。

(三十までに建てられればいいとは思ってたが、さすが公務員、信用度抜群だぜ。楽勝でローンが組めた……！)

着々と工事が進む現場を前に、湊は一人、笑い続ける。

四角い眼鏡のレンズをくいと指で押し上げながら、

「くくくく……くくくくく」

などと悪役っぽい笑い声を上げる姿はかなりアレだったが、幸い、見ている者はいない。なにしろ周囲にあるのは山と空き地ばかりなのだ。道路がすっかり整備されている分、わびしさが際立つ。

(まさかこんなただっ広い土地があんな格安で買えるなんてな。これなら地下室作ってもお釣りが来るぜ)

湊が購入したのは、山を切り崩した土地の一角だ。バブルの時代にはここに住宅地を作る計画だったらしいが、今では百メートル圏内に隣家すら存在しない。だから信じられないような格安で購入できたのだ。

(持つべきは権力者の同好の士だな！)

公務員であることに加え、地元の信金にコネのある知人の口添えがあったことで、あっさりと、しかも悪くない利率でローンが組めた。親からも無担保無利子で頭金をたっぷり借りることができた(ただし「さっさと結婚して孫の顔を見せろ」という

約束をさせられたが）。

ここまでは順調すぎて怖いくらいである。

「くくっ、周囲には工場も商業施設もない。民家もほとんどない。これなら良質なアースが取れるぜ」

湊は祖父と叔父の影響を受けた、生粋のAVマニアだ。エッチなアレではなく、オーディオヴィジュアルのほうだ。

そのため、周囲に気兼ねなく大音量が出せ、アースや屋内配線、防音、ルームチューニングなどに（予算の範囲内で）こだわられるマイホームがずっと欲しかったのだ。

「これでアニメに強いローカル局が映ればなにも文句はないんだがなー。まー、配信があるから、大した問題ではないが。むしろ配信ありゃ、大抵はカバーできるし」

そして湊のもう一つの趣味がアニメだった。むしろこちらがメインで、AVがサブと言えるかもしれない。美麗な大画面と迫力の音でアニメを楽しむのが究極の目標なのだ。

ついでに付け加えれば、この男、萌え豚である。

（悪いな父さん母さん。僕はこの田舎で一人、二次元の嫁たちとともに骨を埋める覚悟だ！ 孫は弟に任せた！）

湊の心はずでにマイAVルームでの、愛する嫁たちとの日々トリップしていた。

「へへ……へへへへ……」

「あの……旦那？ 旦那？」

湊の心が現実世界に戻って来たのは、工事を請け負う業者の、遠慮がちな声だった。
「……はっ！ は、はい、なんででしょう？」

緩みきった顔を引き締め、指で眼鏡のフレームをくいっと押し上げる湊からは、謎の公務員オーラが散布されていた。

実際の公務員が纏うそれではなく、一般市民が公務員に抱くイメージを濃縮したような、不可思議な空気で周囲をガードする。己の変態性を隠すのは子供の頃からの特技だ。この仕事に就いて、さらに磨きがかかっている。

「地下室の件なんです、実はちょっとご相談があります」

「はっはっはー！ ついに！ ついに僕の城が完成した！ 夢の！ 念願の！ 嫁たちとの愛の巣だ！」

それまで住んでいた借家からの引っ越しを終えた湊は、地下室にこしらえたAVルームで歓喜に踊っていた。

細かい機材のセッティングなどは後日、同好の士たちが手伝ってくれることになっ

ているので必要最小限しか設置していないが、取り敢えずTVは映る。今日はこの地下室で一人、祝杯を挙げながら深夜アニメを堪能するつもりだった。

「今夜は……お、そうだそうだ、『おねがい哉かなら羅様っ』があったな。今回は水着回だから録画はミスれん！」

リモコンでレコーダーの予約を確認したのち、チェアに座る。が、湊はすぐに立ち上がり、地下室の一角に向かう。

「そーいや今日は拝んでなかったな」

そこには、当初の予定にはなかった神棚がある。湊は無宗教だし、特別信心深いわけではない。それなのに神棚を設置したのにはもちろん理由がある。

工事の際、地中から古びた祠のようなものが出てきたと業者に言われたせいだ。昔、この辺りが山だった際に建てられたのだろうが、詳細はわからない。一応湊も役所の資料などを調べてみたが、なんの情報も得られなかった。

（これもなにかの縁だからな。もしかしたら可愛い美少女神様が現れるかもしれないし！）

といったオタクらしい下心もあり、地下室に神棚を設置したのである。

無論、本気でそんなファンタジーなミラクルを信じてるわけではないが、それでも夢を諦めきれないのがオタクであり、漢なのだ。

「よし、時間だ！　いよいよ僕の長年の夢が叶う瞬間だ！」

どかりとチェアに座ると、七七インチの有機ELTVの電源を入れる。

記念すべきマイホームシアターで見る最初の映像は、巫女服を着た美少女ロリババアのアニメだった。

「うっひょー！　哉羅様のそのツルペタっぷりがたまらん！」

まさかこれが自身の運命を暗示しているとは夢にも思わず、無人の地下室でアニメに歓声を上げる二十六歳の独身であった。

「鳥居くん、お疲れ気味だね。まだ引っ越しの片付けが終わってないのかい？」

三ヶ月に一度、湊は寝不足に襲われる。

「いえ、それはみなさんに手伝っていただいたおかげでもうほとんど片付きました。

ちよっとその……海外ドラマシリーズにはまってしまいました」

上司の質問に対し、ささやかな嘘を返す。

（言えない……次のクルルの新番の前までに、録り溜めたアニメを毎晩見まくってるだなんて絶対に言えないっ）

湊は職場では真面目で純朴な青年として通している。

いずれは波長の合う人間にはカミングアウトするつもりだが、都会と違ってよくも悪くも人間関係が密接かつ純朴な土地柄である、己の趣味がそう簡単に受け入れられるとは思っていない。

「ああ、私も経験あるよ。特に最近は配信で色々やってるしね、時間がいくらあっても足りないね」

「はい、ああいうのって一度見始めると止まらなくなるんですよ」
当然、鳥居家ではほぼ100%、アニメ関連番組ばかり視聴している。

「ははは、同感だ。でも明日からは三連休だ、今日も頑張ってくれよ」
「はい」

人畜無害そうな好青年マスクを装着して、穏やかな笑顔で答える。

(そうだ、この連休で残りのアニメを全部消化して、編集して、新アニメの情報収集もせねばならんだ……!)

そんなモチベーションをフルに活用し、しっかり定時までには仕事を終えてさっさと帰宅する湊の後ろ姿を、

「うん、相変わらず仕事熱心のいい若者だ」

「あとはお嫁さんかしらね。誰かいい人いればいいんだけど」

「奥手そうだし、こっちでいい娘を紹介したらどうかね？」

「いいわね。持ち家もあるんだし、よりどりみどりじゃない？」

「あれだけ真面目な好青年なものな」

「よし、ここは上司である私が一肌脱ぐとするか」

周囲の者たちは温かいまなざしで見送るのだった。

まさかその当人の脳内を占めているのが、今期の正妻を誰にすべきか、などという事案であるとも知らずに。

「よし、全部見終わったあぁ！ これで心置きなく新アニメにブヒれるぜ！」

連休初日を丸々費やして今期アニメをすべて消化した湊は、夕食を摂るとすぐに再び地下室に籠もった。

「今期はスマッシュヒットは何本かあったけど、大当たりはなかったな。円盤買うレベルだったのは『哉羅様』くらいか」

思ったよりも早く編集作業も終わったので、湊はライブラリからお気に入りアニメのBDを取り出す。去年放映した作品だが、BD版はまだ観てなかったのだ。

「配信はいつなくなるからわからんしな。やっぱ、物理ディスク最強。ただ、買ったことで安心して、結局積んでしまう行動になにか名前をつけられないものか」

などつつぶやきながら、同好の士（アニメではなくAVマニアのほう）に格安で譲ってもらったプレイヤーの電源を入れる。配信がメインになった現代では、こうした物理プレイヤーは今や貴重品である。

「やっぱり一話と二話はイイなー」

「お、四話の作画崩壊、ちゃんと手直しされてる。いい仕事してるぜ」

「くくくく、不自然な光が消えてピンク色のつぼみが見えてる……これでこそ円盤を買った甲斐があるというものよ」

「おおお、戦闘シーン、すっげー！　そしてなにげにエロい！」

元のソースは二・〇チャンネルだが、AVアンプの疑似サラウンド機能を使っているため、四方八方から音が飛んでくる。大きなスクリーンに映し出されたプロジェクトの美しい画面に目が奪われる。

「あああ、たまらん……たまらん……この瞬間のために生きてる……！」

全六巻のうち、五巻まで見終わった湊は、ほう、と感動のため息を吐く。この至福の時間が欲しくて住み慣れた町を離れ、この地で公務員になったのだ。

「さて、次はなに観ようかなっ」と

「っ!？」

「……ん？」

BDボックスを棚に戻そうとしたそのとき、地下室に妙な気配を感じた。息を呑むような、そんな音が聞こえた気がしたのだ。

「……空耳か」

首を傾げつつ別作品のBDを取り出した直後、今度ははっきりとした声が響いた。

「なぜ続きを観んのじゃ!？」

「!？」

突然聞こえてきた若い女の声に、湊が最初に疑ったのは映像機器だった。しかし、プレイヤーにはなんのディスクもセットされていないし、スクリーンも白いままだ。レコーダーやTVの電源もオフになっている。AVアンプのセレクター表示もプレイヤーになっていた。

「……疲れてるのかな」

取り出した別作品のディスクをトレイに置こうとすると、

「聞こえんのか、このバカ者がッ。続きを、さっきの続きを観せろと言うておる！」
幻聴にしてはやたらと明瞭な声が飛んできた。

「えー……どなた様？ 幽霊に知り合いはいないつもりだけど」

「誰が幽霊じゃ！ そんなもんと一緒にするでない！」

「……もしかして、その人？」

神棚を指差す。

「指を差すな！……そうじゃ、儂じゃ！」

神棚から雲のようなものが出てきたかと思うと、そのまま人の形になった。

「……ッ！」

湊の目の前に現れたのは、巫女服に身を包んだ愛らしい顔立ちの少女だった。

その長い黄金色の髪からは一組の長い耳がぴょこんと伸びている。

そして腰の辺りには、髪と同じ色をした大きな尻尾が生えていた。



「ふふふ、どうじゃ驚いたか。びびっておるな？ 当然じゃ。なにしろ儂は」

「ケモ耳娘来たああああっ！ しかも巫女！ 美少女！ たまんねえええっ!!」

「ひっ!? ちょ、ちよっと貴様、お、おい……おい!？」

いきなりガッツポーズ&絶叫の湊に、巫女少女がちよっと脅えた表情を浮かべる。

「イエス！ イエスイエス！ なにこれ、僕の人生、完全勝ち組じゃん！ イエース！」

「こ、こら、おい……なあ……なああってば！」

「おっとこれは失礼、ケモ耳様。はじめまして。僕は鳥居湊と申します」

きりりとよそ行きの凜々しい顔を作り、深々一礼する。

「し、知っておる。なにしろずっとそこで貴様を眺めておったからな」

「ああ、やっぱり！ それで、それでやっぱりお狐様かな？ 狐だよね、この耳と尻

尾は!……あ、あれ?」

我慢できなくて耳と尻尾に触れようとしたが、その手もふもふにありつくことはなく、虚しく空を切る。

「なにこれ。触れないよ？」

「き、貴様、いきなりおなごの身体に触ろうなどと……どんだけ無礼者なのじゃ」

「え？ だってケモ耳だよ？ 尻尾だよ？」

「なぜそこできよとんとした顔になるのか、理解不能なのじゃが」

「そこにケモ耳が、尻尾があったら触るでしょ撫でるでしょもふるでしょ？」

「だ、だからどうして儂がおかしいみたいなの目で見るのじゃっ」

「……僕、なにか変なこと言ってる？」

湊としたら自分のなかにこの少女が憤慨しているのかまったくわからないため、首を傾げるほかはない。

「くっ……まあよい。貴様がまともな輩でないのはすでに知っておるからの。……儂はルナルじゃ。ナルと呼ぶのを特別に許そう」

「ルナル？」

顔立ちや服装、言葉使いは和風なのに、西洋風の名前であることに違和感を覚える。

（確か、フランス語で狐を意味するんだっただかな）

となると、やはりあの耳と尻尾は狐なのだろうと納得する。

「じゃあ、ナルはフランスから日本に来たの？」

「いや、儂は生粋の日本生まれの日本育ちじゃ。異国どころか、この付近から離れることもできん身じゃからな」

「だったらなんでそんなこじやれた名前なのさ」

「これは知り合いの人間が勝手につけた名じゃ。ハイカラなものが好きな娘じゃった

んでな。まあ、今頃はいい歳のばあさまになっておるだろうが」

「ロリババアも来たあああああっ!! イエス! イエスイエス!!」

「ひい!」

またもいきなり叫んだ湊に、ナルと名乗った狐娘が飛び退く。

「で、で、ナルは何歳なの!」

「く、詳しくは覚えておらぬ。まあ、数百年は生きておるはずじゃがの」

「イエスッ!」

渾身のガッツポーズをする湊と、なにか穢らわしいものでも見るような視線を注ぐナル。地下室の空気が微妙なものへと変貌していく。

「……貴様は驚かぬのじゃな。儂が怖くはないのか?」

「あー、こんなのアニメとかじゃ定番ネタだからね。あれでしょ、元はイタズラ好きの狐とかだったから旅の修験者あたりに封印されちゃって、だけどこの山を崩すときに復活した、なんて感じ?」

「……半分くらいは当たっておる」

ナル、明らかに悔しげな顔になる。目の前のおかしな男に己の素性を言い当てられたのがよほど気に食わないらしい。

「言っておくが、別に儂は大した悪さなどしておらぬぞ? それに、封印されたあと

はこの地の守り神として祀られた時期も長い」

「あー、だから巫女さんの格好なんだ。いい仕事してるぜ、この土地に住んでた人たちは」

湊、今度はサムズアップ。ナル、さらにイヤそうな顔。

「まあ、そんなわけで僕はしばらくこの辺りでぼんやりしたら漂っておったのじゃが、貴様がこの部屋をこしらえたおかげで、久方ぶりにこうして人の姿になる力を取り戻した、というわけじゃ」

「でも耳も尻尾ももふれなかったけど？ 触ろうとしたらすかっと手が空を切ったんだけど？」

「貴様一人の、いい加減な信心程度でそうそう力が漲るわけがなからう」

「じゃあ、僕がナル様を崇め奉れば、ついに夢の狐巫女の爆誕ってわけか！」

「……………理屈の上では、そうなる、の」

ナルが心底イヤそうに頷く。耳が警戒するようにこちらに向けられる。

「そっかそっか。具体的にはどうすればいいわけ？ お供えとか？」

「それでもいい。とにかく、僕を崇め、僕が喜ぶ行為をすればいいのじゃ。さすれば再び力を溜められる」

「喜ぶ行為って……………油揚げとか？」

「うむ。悪くない。悪くないぞ？」

太い尻尾がわっさわっさと揺れるのを見ると、やはり油揚げは好物らしい。

「しかし、狐だからと油揚げという短絡思考はいただけぬ。貴様も二十一世紀、令和の世に生きているのであるろう？　ならばもっとこう、現代的な供物のほうが効果は大きいぞ？」

「現代的な？」

「物質的な享楽を追い求めた前世紀と異なり、今世紀はより精神的な、スピリチュアルなエンターテインメントを儂に供するがよい」

「数百年生きてるロリババァ狐っ娘巫女、どこで横文字覚えた」

「そこらをふよふよ漂っているあいだ、暇じゃったから、TVやらネットの電波をキヤッチしておったのじゃ。5Gや11axにもとっくに対応済みじゃ」

「便利だなおい。最新規格にも対応かよ」

「……だから、ほれ」

「へ？」

「ええい、ここまで具体的に言ってやっておるのになぜわからぬ、この愚か者めが！」

「あー。要するにお狐様はあれか、さっきのアニメの続きが気になるわけか」

「……」

返事はない。しかし、それが答えだ。物欲しげに大きな尻尾が小さく、でも忙しく左右に揺れている。

「もしかして、この部屋で再生したアニメ、全部観てたの？」

「こんな地下室じゃ他に娯楽などないでな、別に興味などなかったが、暇潰しに観てやったわ」

「暇潰しレベルなら、別に続き再生しなくてもいいよね」

「あ、いやいや、今のは僕も大人気なかった！ 続きが気になるのじゃ、さっさと再生するがよいぞ小僧！」

「小僧って……。僕も一応大人なんだけど」

「僕から観ればこわっぱも同然よ。……名はなんといい？」

「湊。鳥居湊だよ。って、さっき名乗ったよね？」

「そうじゃったかの？ では湊。とっととその円盤をセットするがよい」

「えー。でも僕、あんまりあのラスト、好きじゃないんだよねー。だって結局、」

「こら、ネタバレするでない！ 貴様、地獄に叩き落とされたいのか!？」

「あー、はいはい、了解しましたよっと」

なんだか面倒な人外娘だと思いつつも、扱いやすそうだし特に害もなさそうなので、

素直にお願いを聞いてやることにした。

(なにより、可愛いしな！)

それが一番の理由なのは言うまでもないが。

一時間後。

「むー」

「言ったとおりだったろ、微妙だって」

「むむー」

「完全に続編ありきの前提で作っちゃってるせいで、なんか投げっぱなしなんだよな」

「むむむー」

「だからやめとけて言ったのに」

「黙れ。僕は今、僕の中でこの物語の評価をどうするか悩んでいるところなのじゃ」
「年齢百歳の狐っ娘、耳を交互に折り曲げながら思案顔を浮かべる。」

「悩んでる時点でもう、微妙な評価じゃないのか？」

「うるさいぞ小僧」

「湊だつて。二十六にもなつて小僧は勘弁だ。これから一緒に暮らすんだから、ちゃんと名前で呼んでくれよ、ナル」

「……貴様、今、さらつと凄いいことほざきおつたな？」

「ん、だつてナルはここから離れられないんでしょ？」

湊が神棚を指差す。

「いや、あそこに置いてある儂の神体を動かせば、この山の付近であれば動き回れるはずじゃ」

「あのご神体つて、中身、なに？」

神棚に置いてある古い壺は、地下室工事の際に出土したものだ。

「儂の骨じゃ」

「あ、やっぱり。開けて見てもいい？」

「……普通、見たがるか、そんなもの」

「目の前の美少女に触れないなら、代わりに骨でも撫でてみようかと」

「……！」

ずざつ、とナルが後方に後ずさる。

「変態じゃ……真性の変態が目のおる……！」

「失礼だなあ。僕はただの人畜無害なオタクだよ？」

「ええい黙れ変態。……壺は開けるでないぞ。骨が砕けて粉になっておるだろうから、飛び散ると難儀じゃ」

「そっか。じゃあ諦めよう。……これ、ナルは触れないの？」

「自分の神体には触れぬ。だから儂がこの暗く狭くじめじめした地下から移動するには、貴様がそれを運び出す必要がある」

「ふうん。なら、ちょっと運んでみる？ 外に出てみたいでしょ？」

「ここから出たがると思ったので湊はそう提案してみたが、返ってきたのは意外な答えだった。」

「いや。別に。特には」

「え？ なんで？ 暗くて狭くてじめじめした地下室なんてイヤだって言ったじゃん、ついさっき」

「確かに儂はここを暗くて狭くてじめじめした部屋と言った」

「ほら」

「じゃが、イヤとは言っておらぬぞ」

「へ？」

「儂は狐じゃ、巣穴を掘って暮らしていたのじゃ、暗くて狭くてじめじめしたところはむしろ落ち着く」

「はあ。んじゃ、せめて一階に出てみる？」

「……まあ、そのうちにな」

狐巫女、明らかに気乗りしない顔を浮かべる。

(もしかしてこいつ……引きこもり体質か?)

なんとなく自分と同類の匂いを目の前の人外ロリババァから嗅ぎ取る。

「取り敢えず、ナルはしばらくここに居着く、ってことでいいのかな？」

「うむ。儂のような気高く美しい狐と同居できる僥倖に感謝するがよいぞ、湊」

初めて湊を名前で呼ぶと、ナルはにんまりと微笑んだ。

可愛い狐っ娘との同居生活が始まって、湊の生活はそれほど大きくは変わらなかった。

仕事に行く前、夜行性のナルのために朝昼兼用の食事を地下室に用意することと、帰宅後、アニメを観るときに一人ではなく二人になったことくらいだ。

「ああ、あとは食費が増えたか」

「む。なんだ。それは儂に金子きんすを要求してるのか」

「いや、それくらいは別に大した影響ないからいいんだけど。むしろナルの酒代のほ

うがヤバイ」

「なにを言う。儂なりに貴様に気を遣い、量を控えているのがわからぬのか」

「控えてそれかよ」

長年の夢だったマイホームシアターには、空になった酒瓶がいくつも並べられている。週に一度の資源ゴミ回収のたびに大量の酒瓶を出すのにも、すっかり慣れた湊である。

幸か不幸か、「またあんなにお酒の空き瓶出してるわ」と噂するご近所さんがいないため、今のところ金銭的な被害だけで収まっているが。その金銭的な被害も結構バカにならない額になりつつあるのだが。

「大昔、儂がちょおっとだけやんちゃしておった頃にな、酔わせてしまえば大人しくなるだろうとちょこざいなことを考えた愚か者がいたのじゃ」

「で、まんまと酒の味を覚えちゃったわけだな、このダメ狐。今の言い方、俺も昔はワルかったぜ、なんて自慢始めるバカなオヤジみたいだし」

湊はよくも悪くも生真面目な人生を歩んできたので、他人様に迷惑をかけてきた過去を偉そうに語るカスも、そいつらを讚えるアホも大嫌いだ。しかし、

「そもそもお前のやんちゃなんて、ガキのイタズラレベルだろ。騒がしいガキにおもちゃ与えて静かにさせようってのと一緒だよな」

「なっ。わ、儂のワルっぷりを舐めるでないぞ小僧っ。かつてはこの山一帯を支配し、人間どもを恐怖のどん底に叩き落とした妖狐とは儂のことじゃ！」

「あー、はいはい。それで、今日はなにを見るんだ？」

「こら待て、なんじゃそのぞんざいな態度はっ」

「だってさあ、何百年も生きてる妖狐ってわりには、やってるのがせせこましいっちゃうか、みみっちいっちゃうかさあ」

同居を始めてすでに一ヶ月半、互いの身の上話は済ませてある。当然、封印される前のナルのことも色々聞き出していた。

「この辺りを支配してたっても、ここは昔から過疎だったようだし、別に他の妖怪がいたわけでもなし。人間を恐怖に叩きこんだっても、せいぜい、なにかに化けてからかったとか、作物を少しだけちよろまかした程度なんだろ？」

ナル本人は頑として認めなかったが、話を聞く限り、どうも当時の人間たちはイタズラ好きの困った狐だな、あははは……みたいな扱いをしていたように思えてならないのだ。

「ぬなっ。小僧の分際で儂の悪行の数々を笑うでないっ」

地元の郷土史愛好家（本業は高校の教師）を訪ねてそういった話が伝わってないか聞いてみたところ、一応、それっぽい伝承はあった。

「悪行、ねえ。聞いた話だと、酒に酔って人間に逆にイタズラされたってこともあったそうじゃないか。他にもいくつか仕入れてきたぞ、お前と思しき狐の話」

「……………くだらぬ話は時間の無駄じゃ。ほれ、とっとと今日のアニメを選べ。あと、酒と飯の追加じゃ」

都合が悪くなった途端に逃げるのも、この一月半で学んだナルの性質だった。

「なんじゃ、その生温かい目は。気持ち悪い」

「いや。これがアニメとかマンガだったら、お前はすっげえ強くて悪い妖狐の設定で、封印されてた別人格が暴走しちゃったりして、穏やかな日常が一変、バトルとか鬱展開になるんだろうなーって」

「くくく。実はな湊、儂には隠された忌まわしき妖力が」

「はいはい、厨二乙」

「ぬなっ!? スルーするでない、儂は本当に」

「ほー。ホントだな? ホントのホントだな? 嘘吐いてたら酒のグレード下げるぞ。」

純米酒から、醸造アルコール添付の酒にするぞ。味の調整とか香り付けのために敢えてアル添してるやつじゃなくて、単に量を増やすためだけの安かろう悪かろう酒だぞ」

「……………嘘吐いてすみませんでした。儂は弱い狐です。封印が解けてフルパワーに

戻っても、空を飛べたり、火を吐ける程度の二流の妖狐です」

「ただけ酒好きなんだお前……」

あっさり己の発言を翻す狐巫女に思わず湊は苦笑する。

「ってか、空飛べるんだ。火を吐けるんだ。凄えじゃん」

「まあ。余裕じゃ余裕」

「まあ、今は妖力全然足りなくて、自分じゃなにもできないんだけどな」

「黙れ、この腐れ眼鏡！ ほれ、とっとと再生するのじゃ、儂に酒と食い物を寄こす

のじゃ！」

ただでさえ大きな尻尾をぼわん、と膨らませるナルに、

「へいへい」

湊は肩をすくめながら笑うのだった。

地元のアマチュア郷土研究者にもらった情報と本人の話から湊が組み立てたのは、以下のストーリーだ。

イタズラ好きな妖狐だったナルはまず、旅の修験者によって酒瓶に封印される（酔い潰されたようだ）。その後、なんやかんやで（本人の記憶も曖昧だからよくわから

ない) 地元の神社に移り、その神主に封印を解除してもらおう。

その神社では衣食住を世話してもらって代わりに巫女みたいな真似をしていたらしい。現在の格好はそのときの名残なのだろう。

そして神社が寂れ、今度はナル自身が信仰の対象となり小さな祠が作られるも、戦争や自然災害や過疎化やらで忘れ去られ、しまいには山の造成で土中に沈んでしまった、というわけだ。

この推測をナルに言うと、

「うむ。概ね間違っていない………はずじゃ」

と、頼りない返事が戻ってきた。

「なんだよ、はず、ってのは。自分のことだろ？」

「いや、俺も数百年生きておるからの。記憶が曖昧なのじゃ。特にほれ、湊に発掘されるまでは半分、幽体のようになってふよふよとしておったからの、どうも記憶が混濁しておるのだ」

「……」

「ち、違うからのっ、俺はまだぴちぴちの娘じゃからのっ、決して、断じて、絶対に老化のせいなどではないぞっ！」

「ああ、うん、そうだね。少なくとも外見は若いもんね。ロリババァ最高！」

「だからババアでないとやっておるじゃろーがっ」

どちらにせよ、湊もナルも過去には別に興味はないから、これといった問題にはなっていない。むしろ当面の課題は、ナルの妖力をどう回復するかだった。

現在、ナルは自分の身体を物質化できるだけの力がない。

今、ナルが触れられるのは、祠に神体といっしょに祀られていた徳利とお猪口、縁の欠けた皿と箸のみだ。これらに入れられた酒や乗せられた食べ物だけ、ナルは口にできる。

「なあなあ、ナル」

「なんじゃ」

「お前、祠が土に埋まってるあいだは別になににも食べたりしなかったんだろ？」

「うむ。妖怪じゃからの。別に百年二百年食わぬとも死にはせん」

「だったらなんで毎日、薄給の地方公務員に食い物と酒を要求するんだ？」

「美味いからじゃ。生きるためではなく、楽しみのためじゃ」

「……なるほど」

「不満か？ 食費が惜しいか？ 面倒か？」

「不満ってほどじゃないよ。ナルみたいな可愛い狐っ娘巫女と一緒に生活なんて最高だからな」

「そ、そうか」

湊のセリフに、ナルの尻尾がわさわさと揺れる。耳もぴよこぴよこ動く。

「僕はいいいけど、ナルが不便だろうなって。僕がいないと酒も食べ物も補充できないじゃん」

ナルがなにかを食べたり飲んだりするためには、祠に祀られていた食器に一度置かなければならない。ナルはそれ以外のものに触れられないのだ。

「だから、貴様がとっとと儂を神のごとく崇めればよい。今の儂の力の源は人間の信心じゃからな」

ただの妖狐だった頃は妖力は自然に回復したらしいが、巫女として、そして狐様として祀られた経緯により、現在のナルは誰かに崇められなければ存在すら難しくなる。

「ちゃんと毎日、ナルのご神体を拝んでるじゃんか」

「足りぬな。このペースではあと何十年かかるかわかったものではない。そんなには待てぬ」

「時間の概念が人間と違うんじゃないのかったのか？」

「このままでは自分でリモコンもいじれぬではないか。ネットも見られぬではないか」

ナルが力の回復にこだわる理由はここだった。

現在のナルは一日中この地下室に籠もっているが（一応、鳥居家の中ならば自由に移動できることは確認済み。ただし、本人にその気がない）、なにをしているかという、ただひたすらにTVを見ている。

「儂だって自由にチャンネルを変えたいのじゃ。ザッピングしたいのじゃ。午後の映画を観つつ色々つぶやきたいのじゃ。面白い番組がなければ貴様の円盤コレクションを自由に漁り、好き勝手に二次元の世界に興じたいのじゃ。それにも飽きたら、ネットをだらだら眺めたいのじゃ」

「どんだけ俗っぽい巫女なんだこいつ……」

残念ながら、ナルのこの希望は叶えられない。リモコンもスマホもPCもいじれないのだから当然である。

「こうなったら湊、どこぞから生け贄を調達せい。さすれば儂の力も一気に回復するはずじゃ」

「無茶言うなよ。毎日こうやってお前に付き合ってたんだから、我慢しろって」

職場から帰ると真っ直ぐに地下室に来て、退屈していたナルのために食事と酒を用意し、好きなチャンネルを見せてやり、話し相手にもなってやるのがここのところの湊の日課となっていた。

「ほお？ まるでイヤイヤ儂に付き合ってるような言い方じゃの？」

齡數百歳の妖狐巫女の瞳が細められる。

「な、なんだよ」

「知っておるぞ。貴様が儂のことをいつもちらちらと視姦しておるのを」

「ん な っ ……」

「まったく儂も罪な牝じゃのお。まあ、無理もない。この美貌と可憐さじゃ、どんな牝もいちころじゃろうて」

「美貌はいいとして……可憐？」

「文句があるのか、この童貞めが」

「え。童貞じゃないよ？」

「む。では言い換えよう。素人童貞めが」

「なんでそんな俗っぽい単語をいっぱい知ってるのかはともかく……素人童貞でもないよ、僕」

「ぬな。見栄を張るでないぞ、湊」

「いや、マジで。一人しか知らないけど」

「……マジでか。マジで貴様、女を知っておるのか」

「うん。もうとっくに振られてるけど」

あまり思い出さたくない過去だったので、知らず、表情が曇る。

しかし、それが逆にナルの興味を引いてしまう結果になる。

「ほお。聞かせる。お前のようなオタクと付き合った物好きはどんな牝じゃった？」

「……高校のときの同級生」

こうなったときのナルはいつまでもしつこく食らいついてくるとこの一月半の同居生活で学んでいたので、湊は諦めて話し始めた。

「なんじゃ、湊のくせに意外と早く童貞を捨てたんじゃな。チッ」

「どうしてそこで舌打ちされなきゃならんのかよくわかんないんだけど。あと、付き合い始めたのは大学に入ってからだよ。偶然同じ大学になって、それから」

「ほお。で、なんで別れたんじゃ。こんな辺鄙なところに就職したせいか？」

「自分の生まれ故郷だろ、ここ」

「事実じゃ。人間より獣のほうが数が多いぞ、間違いない」

「ひ、否定しづらいな、それ」

職場のある駅前はそれなりに開けているし人口もそこそこ多いが、新居のあるこの周辺にはほとんど誰も住んでいない。先日も野生の狸を見かけたばかりだ。猪もいるらしい。

「別れたのは、就職を決めるより前だよ」

「浮気したのか？　されたのか？」

「……楽しそうだな、お前」

「古今東西、他人の不幸は蜜の味と相場が決まっておる」

よくもまあ昔の村人たちはこんなゲスい狐を祀ったものだと思いつつ、でも不思議と不快に感じない。

「浮気はしてないし、されてもないよ。……ああ、浮気になる、のかな。僕が」

「なんと。湊が浮気されるのならわかるが、その逆とな」

ナル、本気で驚いているらしく、耳がびこびここと交互に跳ねている。

「二次元にしか興味が無いと思ってたが、貴様、なかなかの淫獣ではないか」

「また妙な言葉を使う……」

「で、二股がバレたのじゃな？　修羅場だったのじゃな？」

黄金色の尻尾がわさわさと左右に揺れる。あれをわしゃわしゃと撫で回したいが、残念ながら触れられない。

「いや、二股どころじゃなかったから。僕、年に四人くらいは浮気してたし」

「………ああ、そういうことか」

事情を察したのだろう、ナルの顔から急速に興味が薄れていくのがわかる。

「よーするにアレじゃな、『俺の嫁』」

「はい、そのとおりでございます」

湊は自分の趣味（ＡＶではなくアニメのほう）をひたすらに隠蔽しながら過ごしてきた。この趣味をカミングアウトしたのはごく一部の、同好の士たちのみだ。

別に迫害された過去があるわけではなく、ただ、偏見の目で見られると面倒だな、という程度の理由だ。それは恋人に対しても同様で、付き合い始めてからもしばらくは自分の趣味は黙ったままだった。

しかしある日、湊がなにか隠していると勘づいた恋人に問い詰められ、白状してしまう。そしてそこからぎくしゃくし始め、忙しくなった就職活動を言い訳に疎遠になり、自然消滅的に別れたのだ。

「貴様、恋人にそこまでどん引きされるような趣味をもっておったのか？」

「い、いや、そんなことないって。ナルが見てるアニメと一緒にだよ」

「ぬ？　それが事実なら解せぬな。この程度でなぜ別れる話になるのじゃ？」

ナルはＢＤなどが並べられたラックを眺めて、何度も首を傾げる。耳がぺたんこ垂れてるのがやたらと可愛く、湊は思わず背後から抱き締めそうになる。

「あいつは……こういうのがダメらしいんだ。アニメとかマンガとか、そういうのは

犯罪者予備軍が見るものだって思ってるみたいで」

「はっ！ よかったではないか、湊。そんなクソ牝と縁が切れたのじゃ、喜ぶがいい」

「うん、正直言うと、あのまま付き合ってもお互い不幸になっただろうってわかってる。だから、後悔はしてないんだ。もう二度と会うこともないはずだし、会いたくとも思わない」

これは強がりでもなんでもなく、湊の本心だった。

「そのわりにはすっきりせん顔じゃの？ まだなにかあるのか？」

「まあ、そうだね。彼女にはこの趣味のことで散々罵倒されたからさ、ちょっとトラウマっぽくなってる、かな」

普段は物静かで理知的だと思っていた恋人の口から次々と飛び出す罵詈雑言は、湊の心に今も突き刺さっている。

そんな理由もあり、この土地に来てからはこれまで以上に己の趣味を隠すようにしている。

「だからさ、ナルと一緒に暮らせるようになって嬉しいんだ。こうして毎晩、一緒にアニメを見て、あーだこーだと言ひ合えるのが凄く楽しい」

「ふふふふ、そうじゃ、もっともっと感謝せい。具体的には酒の質と量とで感謝を示

すがよい」

湊の言葉に反応したのか、ナルの尻尾がいつも以上にばっさばっさと左右に揺れている。頬が赤らんでいるのは気のせいではないはずだ。

「今だって結構いい酒買ってるんだぜ？」

「僕は米の味が残ってるのが好みじゃが、たまにはすっきり味も堪能したいぞ」

「要するに、大吟醸買ってこいってことか」

「察しがいいの。あと、『哉羅様』のBDもじゃ。オーディオコメンタリーが聞きたい。原作者描き下ろしのコミックが載ってる小冊子も読みたい」

夏のボーナスの一部は支給前に目減りするのがどうやら確定のようだった。買おうと思っていた全録レコーダーが遠のきがっくり肩を落とす湊を、ナルがにたにたしながら見つめていた。

「湊、問題が発生した。極めて由々しき事態じゃ」

じわじわ不快指数が上昇してきた七月初旬、これまでで一番シリアスな顔をしたナルが口を開いた。そのあまりに真剣な、追い詰められた表情に湊も思わず生唾を呑み込む。

「な……なにが起きた。まさか……マジで鬱展開突入なのか？ 日常ほわほわパート終了のお知らせなのか？」

すっかり忘れていたが、目の前の美少女が人間でない、非日常そのものの存在であることを思い出す。

「限界、なのじゃ」

「なにがだ？ ここまで抑え込んできた妖力が漏れ始めたのか!？」

「もう、ずっと同じチャンネルを見続けるのが苦痛でたまらんのじゃ……!」

「……はい？」

どうやら日常ほわほわパートは継続が確定のようだったので、ほっとしながら先を促す。

「湊が出かけてるあいだ、僕は同じチャンネルか、あるいは一枚のディスクを見続けるほかはない」

「ま、そうだな。リモコンにも機材にも触れないんだからな。でも、昔みたいに自分で電波拾って他のチャンネル見ればいいじゃん」

「4KやHDRを知った僕に、今さら映りの悪い、ノイズだらけの世界に戻れと言うのか貴様はっ」

「あー……そうだな。その気持ちはわかる」

この狐巫女、いまだに力が戻る気配がなく、相変わらざるものに触ることが叶わない。すなわち、好きな番組を見るには、いちいち湊に頼らざるを得ないのだ。

ちなみに、かろうじて触れられる皿や箸を使ってリモコンをいじろうと試したが、これは見事に失敗に終わった。ナルが触れた時点で箸や皿なども霊体のような存在に変換される仕様らしいのだ。

「なにをほわほわした顔をしておる！ 儂は我慢ならんのじゃ！ 目の前に宝の山があるのに、それをただ見てるだけしかできぬ現状に限界なのじゃ！ ストレスで抜け毛が危険でデンジャーなのじゃ！」

ナルはそう言うと言分の大きな尻尾を抱え込み、そのままがじと噛み始める。これはナルが不機嫌なときによくやる仕草だった。

「ストレスによる抜け毛っつか、物理的な問題じゃねーのか、それ」

今、見ているだけでも黄金色の毛がふわふわと千切れていく。あれを集めてクッションに詰めたらふかふかで気持ちよさそうだなあ、などと考えていると、

「なにをぼさっとしておる、このうつけ者がっ」

すぐ目の前にナルの顔が迫っていた。そしてびん、と指で鼻を弾かれる。

「いてっ！ な、なにすんだよ」

「まったく、湊にはこうして触れるというのに、なぜ儂はリモコンにもスマホにもP

Cにもタブレットにも触れぬのじゃ」

「……僕のせいじゃない、よな？」

「湊のせいじゃ。貴様がもっと儂を敬っておれば、今頃はかつての力が戻っておったはずなのじゃ」

「えー」

ナルの力がまったく戻ってないわけではない。実は少し前から、ナルは湊には触れるようになっていた。

もっとも、だからといってあの尻尾をもふもふする夢が叶ったわけではないのだが。

「と、いうわけで、じゃ。新アニメのシーズンでもあるし、儂はここで抜本的改革に乗り出そうと思う」

「具体的には？」

どうせろくでもない考えだろうと思いつながら尋ねる。

「貴様の血を寄こせ、湊。現在、唯一の儂の信者である湊の血を吸えば、一気に力が戻ってくるはずなのじゃ」

「……ナルって、妖狐にロリババァに巫女ってだけじゃ飽き足らず、吸血鬼属性まで装備するつもり？ いや、うん、僕はオツケーだけどね！ 美少女に血を吸われるヴイジュアルってなんかエロいしさ！」

びっ！、とサムズアップ。

「……そうじゃったな、貴様はそーゆー人間であったな」

どうやら別のリアクションを想定・期待していたらしいナルが、ちょっと残念そう
な、別の意味でも残念そうだなまなざしで湊を見る。

「そこはこう、いやがってもらわないと、儂としても困るんじゃないかの」

「わー、こわーい、ちをすわれるなんていやだよー」

ザ・棒読みで狐巫女様のリクエストにお応えする。納税者のみなさんのご期待には
可能な限り沿いたい地方公務員の湊である。ナルは納税してないけれど。

「そ、そうか。血は怖いか。ではしかたないな、もっと別の体液で代用するしかある
まい」

「ぴん！」

ほのかに赤らんだ頬と落ち着きなく揺れる尻尾を見て、湊はぴんと来るものがあっ
た。だからつい、口でも言ってしまったのだ。

「なるほどなるほど。うんうん、お約束、大切だよね！」

「……なぜそこでベルトを緩める。なぜズボンを脱ぎ始める」

「だってあれだよね、力を得るためにおにんにんからミルクを飲む黄金パターンだよ
ね、この流れって」

「おにん……ああ、男根のことじゃな。ま、うむ……おおむねそんな感じじゃ」

「やっふー！ 十八禁展開来た！」

二十六歳地方公務員、渾身のガッツポーズ&満面の笑み。

しかしすぐに真顔になってナルに尋ねる。

「えと……一応確認なんだけど、ナルってその……誰か恋人がいたりしたの？ あ、いや、僕は処女厨でも処女原理主義者でもないんだけど、やっぱりほら、少しは気になるっていうかね？」

「なんじゃ、この時代になってもおなごの純潔を気にするのか。いつの世も牡は自分で牝に幻想を抱くバカ者なのじゃのお」

「ってことは」

「恋人はおったぞ。肉体関係もあった」

「がーん」

「じゃが、相手は牝じゃ。儂にこの名をつけた娘じゃよ」

「まさかの百合!？」

「しかも巫女じゃった」

「巫女さんと狐っ娘の百合展開いただきましたー！」

まるで○○○○○○で金メダルを獲得したアスリートの如きガッツポーズを見せる

湊に、ナルがこれ以上なく冷ややかな視線を送る。

「そやつは儂を巫女に祭り上げた娘なのじゃが、そーゆー趣味があつての。気づいたらあれこれと仕込まれておつたわ」

「し、仕込まれた!? 百合調教……滾るッ」

湊の妄想がフルパワーで脳内展開する。

「だからまあ、牝の扱いはある程度わかるのじゃ。牡は話でしか知らんがの。……どうじゃ、こんな儂相手でもその気になれるか、湊」

「なれるに決まつてるじゃございせんか!」

「なぜに敬語」

「経験豊富、だけど男を知らない! なにこれ、最高じゃん! しかも巫女! ロリババァ! 狐耳! もふもふ尻尾! たまんないよ!」

「わかつてはおつたが……貴様は本当に……アレな牡なのじゃな……」

「さあ、カモン! いくらでも僕のおにんにんをしゃぶって! 吸って! ミルクをごっくんして!」

湊は思い切りよく下半身裸になると、ナルのレズシーンを想像してすっかりいきり勃ったペニスを露わにする。

「まったく……ムードもへったくれもない牡じゃのお」

「アニメのために男のチ×ポしゃぶろうとする狐に言われたくないなあ」

「うるさい、黙れ。……ほお、これが牡のイチモツか」

仁王立ちした湊の前に跪いたナルが、興味深そうに勃起を観察する。

「牝のマメを百倍くらい大きくした感じか？」

「ああ、至近距離で美少女にまぢまぢと視姦されるの、ぞくぞくする……！」

「びくびくとよう動くもんじゃな。それに……ちよっと匂うぞ、湊」

「あっ、悪い。シャワー浴びてくるよ」

思えば仕事から帰ってきて真っ直ぐ地下室に来たのだ、エチケットとして一度汗を流してくるべきだろう。今日はかなり暑かったからだいぶ汗もかいている。

「別に悪いとは言っておらぬ」

「で、でも匂うって」

「事実を述べたまでじゃ。僕は狐じゃぞ？ 化粧などの匂いは苦手じゃが、牡の汗は

なんとも思わぬ。むしろ」

「むしろ？ むしろなに？」

にまにましながら先を促すが、

「……うるさい。黙れ童貞」

「だから童貞じゃないってば」

目元を赤らめたナルは湊を睨めつけるだけだ。

(あああ、赤面したナルに上目遣いで睨まれるの、なんかイイ……すっごくイイ……ぞくぞくする……新しい扉が開いちゃう感じ……！)

そんなダメ男に小さくため息を吐いてから、ナルが「あーん」と口を開き、湊の先端をぱくりと啜えた。

「はうッ」

前の恋人に振られて以来ずっと独り身の湊にとって、ナルのフェラチオは想像以上の快感だった。

(おおおっ、あったかい……ナルの口、ぽかぽかして気持ちイイっ)

男を知らないのは本当らしく(疑ってはいないが)、亀頭を啜えたはいいものの、この先どうするのかわからないという感じだ。小首を傾げた姿がとんでもなく愛らしく、ペニスがさらに膨張する。

「無理しなくていいぞ、ナル。啜えられるところまで啜えて、あとは舌でぺろぺろしながら、顔を前後に振ってくれば充分だ。ここんところ忙しくて抜いてないから、多分、すぐに出る」

言わなかったが、最近ではナルをオカズに自家発電することもあったので、余計にすぐに爆発しそうな予感がする。

「ほ、ほうか？」

ナルは素直に指示に従い、ゆっくりと湊の分身を口に含んでいく。牙がちょっと擦れるが、それが逆に心地よい刺激となって湊が呻く。

「あ、ああ。あんまり奥まで啜えると噎せるからな、無理はすんな」

昔付き合っていた彼女も喉の奥ぎりぎりまでしゃぶってくれて、よく噎せていたな、などと思いついてしまいい、さっき膨らんだ肉棒が少しだけしんなりする。

「はむ……ちゅ、ぺちゃ……ちゅ、くちゅ……ぺろ……れろっ」

まるでそれが許せないとばかりにナルの舌が湊の屹立を這う。少しざらりとした感触と生々しい熱に、肉竿はあっさり元と元の硬度を取り戻す。

(おおお、ケモ耳美少女がチ×ポれろしてっ……なにこのパラダイスっ)

技巧だけでいえば未熟で物足りなさもあったが、ナルが自分のために初めて口唇奉仕をしてくれた、それだけでもう充分だった。感動で睾丸が迫り上がり、暴発してしまいそうになる。

「ううっ、イイよ、気持ちイイよナルっ……ああっ、狐べろ、最高、狐っ娘フェラ、たままない……!!」

「むむう!？」

半ば無意識にナルの頭に手を伸ばし、耳と髪を撫で回す。さらさらの髪と、弾力の

ある長い耳の心地よい感触に手が止まらなくなる。

「ひゃ、ひゃめろバカもによ、耳はひゃめい……ひゃうっ！」

耳の中に指を潜らせた瞬間、ナルの身体がびくと跳ね、同時にペニスに歯が立てられた。かなり痛い。

「おひっ!? は、歯はやめてっ、マジ痛いから！」

「らってきひゃまが……シン、んぷっ、んっ、くぷっ」

ぎろり、と上目遣いに睨んでくるが、口を離そうとはしない。むしろより深く啣え、ダイナミックに舌を蠢かしてくる。唇の端から涎がこぼれかけてるのがむやみに卑猥



で、湊の愚息はますます膨張する。

(うああ、極楽だ……狐巫女にフェラしてもらえるなんて、僕の人生、もう終わるんじゃないかなあ。いやいや、これは夢って可能性も……おふウ!?)

幸か不幸か、これが夢でない証拠の激痛が敏感な亀頭を襲った。深く呑みこみすぎで先端が喉に当たったナルが噎せ、牙を立てたためだ。

「ひゅ、ひゅまぬ」

「い、いいって。初めてなんだから当然だよ」

「……」

フォローしたつもりだったが、下手と言われたとでも受け取ったのか、ナルの目に闘志が宿る。この狐、案外と負けず嫌いらしい。

「生まれ、こわっぱ。このていころ、儂にかかれば余裕ひゃ」

あまり深く呑みこむのは諦め、亀頭への舌責めに切り替えてくる。すべすべの頬をぱんぱんに膨らませて鈴口を含むと、唾液をたっぷりまぶした舌で音を立てて舐め回す。

さらに右手で肉筒をしごき、左手では陰囊をさわさわと撫でてくる責めも追加して湊を追い込んできた。

「ど、ど、どこでこんな高等テクを！　ちよっ、待ってナル、あっ、これまずいって、

マジでまずいってえ！」

前の恋人にもここまでされたことはなかったし、なにより仕事やナルとのアニメ観賞でオナニーもろくにできなかつた青年にこのトリプル責めはあまりにも強烈すぎた。「じゅっ、じゅっ、じゅぷっ、じゅずずっ、じゅずずずずっ!!」

そんな湊の限界が近いと見破ったナルは、とどめとばかりに強烈なヴァキュームを開始した。上気した頬をへこませ、潤んだ瞳で湊の悶える様を見つめながら、淫らな音を立ててペニスを吸い立てる。

男のモノに奉仕することで自身も昂ぶっているのか、耳が忙しく動き、大きな尻尾がばさばさと部屋の空気を攪拌する。

「ナル、ナル、イクよ、出るからぁ！」

このままでは口内に発射してしまうと咄嗟にナルの顔を股間からどかさうとするが、狐巫女は逆に深々と怒張を呑みこむ。

(そ、そっか、精子を飲んで力を回復するのが目的だったんだっけ)

当初の狙いを思い出した湊はこれ幸いにと軽く腰を揺らし、射精のストッパーを外す。

両手で左右の長耳をしごくように撫でてナルに甘い鼻息を上げさせながら、肉欲の奔流に身を任せる。

「ぢゅっ、ぢゅぢゅぢゅぢゅっ！ んっ、んっ、ンンン……じゅずずずずッ!!」

「ひっ……出る……出る……!!」

ナルの両手が湊の尻に回され、がちりと腰をホールドされた。絶対に、一滴たりとも逃すまいというその強固な意志の前に、湊が爆発する。

「んぐっ!? んぐっ、ふっ、んむむむ……んく……んっ……んく……こく……ん」

(うああ、飲んでる、マジで飲んでる……僕のザーメンをナルが、狐っ娘がごっくんしてる……!!)

元カノにもしてもらったことのない口内射精と飲精のダブル攻撃の感動に膝がぐくぐくと揺れる。そしてその間もナルは深々と勃起を啜えたまま、じゅるじゅると子種汁を啜り続けている。

「ああっ、あああっ……絞られてる……う」

射精が終わってもナルの吸引は終わらず、尿道に残ったものまですっかり飲み干したあとで、ようやく湊の股間から顔を離れた。

「ふはあっ！」

「お、おいナル、平気か？」

「ふん、どんだけ溜めこんでおったのじゃ、このエロガキめが。喉に引っかかって窒息するかと思っただぞ、バカ者」

額にうっすらと汗をかき、きめ細かな肌を艶やかにピンクに染めたナルがいつもの笑みを浮かべる。

「ずいぶんと気持ちよさそうによがっておったな。どうじゃ、儂の超絶テクは」

「あー……うん、よかったよ。うん」

噛まれたのは痛かったけどな、というセリフは呑みこんだものの、なんとなく察したらしく、ナルの顔が少し不機嫌になる。

「儂は世辞は好かん。……まあよい、この程度の淫技、数を重ねれば勝手に上達する。そのうち儂のこの口と舌がなくては生きていけぬよう調教してやるからの、覚悟しておけ」

「え。まだするの？」

「当然じゃろ？ 貴様みたいなごく普通の人間の精気、一度や二度吸った程度では全然足らん。……不満か？」

「まさか！ 大歓迎だ！ 狐巫女ロリババア様のフェラ奉仕のためなら、僕、何度だつて出せるよ！」

イエス、イエス！……といつものガッツポーズを決める湊に、ナルが瞳を妖しく細める。

「そうか。ではせっかくじゃ、もう一発いただくとするかの」

「えっ。ちょ、ちょっと待って。連続はその……あ、らめ、出したばかりで先っぽ敏感だからあ！ あっ……アーツ！」

ナルが自由にリモコンに触れるようになったのはこの二日後、射精回数にして十三回目のことだった。